

ダニエル書3章7節の風琴?

著者	佐々木 哲夫
雑誌名	東北学院大学宗教音楽研究所紀要
巻	18
ページ	9-15
発行年	2014-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00000239/

ダニエル書 3 章 7 節の風琴？

佐々木 哲夫

風琴は、旧約聖書の三箇所（ダニエル 3:5, 10, 15）において、角笛・横笛・六絃琴・豎琴・十三絃琴と共に記されている用語である。しかし、同じ文脈のダニエル書 3 章 7 節では、角笛・横笛・六絃琴・豎琴・十三絃琴が列記されているものの風琴は記されていない。本論は、風琴とは何か、また、ダニエル書 3 章 7 節に風琴が記されていないのは何故かについて論考するものである¹。

1 風琴とは何か

ダニエル書の当該用語は、新共同訳において「風琴」と翻訳されている。風琴という日本語は、今日においては「オルガン、アコーディオン」の意味において使われている²。他の委員会訳聖書では「風笛」（口語訳、新改訳）や「双笛」（岩波訳）と訳出されている³。

さて、旧約聖書原典(Biblia Hebraica Stuttgartensia=BHS)におけるダニエル書の当該用語は、アラム語で書かれており *sûmponyāh* (סוּמְפוֹנְיָה) である⁴。アラム語ではギリシア語起源の借用語名詞に冠詞が付かず、六絃琴 (קִיתָרִס) や十三絃琴 (פְּסַלְתֵּרִין) と同様、*sûmponyāh* (סוּמְפוֹנְיָה) はギリシア語 *sumphōnia*

¹ この課題は、2013 年 12 月 19 日-20 日の両日において行われた東北学院大学クリスマス礼拝のメサイア演奏独唱者としてお招きした声楽家熊木晟二氏から提起されたものである。熊木氏は、弘前在住の声楽家で『ヘンデル《メサイア》必携』教育出版（2009 年）や『『勇敢な水兵』奥好義と東北学院校歌』『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第 7 号（2003 年）15-27 頁などの著作がある。

² 『広辞苑』第五版、2301 頁。

³ 旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店（2005 年）672 頁。

⁴ 旧約聖書はヘブライ語で記されているが、5 箇所（Gen. 31:47, Jer. 10:11, Ezra 4:8-6:18, Dan. 2:4b-7:28）はアラム語で記されている。

(συμφωνία)からの借用語と考えられた⁵。そのようなこともあり、ダニエル書は、アレキサンダー大王（紀元前 332 年）以降のヘレニズム影響下の時代における著作と想定された⁶。しかし、紀元前 8 世紀のアッシリア碑文、また 7 世紀や 6 世紀のペルシャ時代遺物の調査により、ギリシアの影響が紀元前 4 世紀以前にも存在していたことが立証され、それゆえ、ギリシア語借用語の存在を理由としてダニエル書著作年代をアレキサンダー大王以降と推定することは必ずしも確かでない⁷と議論された⁷。

さて、*sûmponyāh* は、何を意味する用語なのであろうか。Phillips Barry は、ルカ 15 章 25 節の *sumphōnia* に関する論文において、ギリシア語 φωνή (voice) をその原義であると想定して論考を展開し、バグパイプ (bagpipe) が意図されていると結論づけた⁸。この論考に対し George F. Moore は、*sûmponyāh* を楽器であると想定した Barry の議論を支持しつつも、その楽器をバグパイプと同定したことについてラビ文献を援用しつつ論駁し、パンパイプ (pan's pipe) もしくは笛 (whistle) であると推定した⁹。

⁵ ギリシア語 *sumphōnia* は、新約聖書ではルカ 15:25 においてのみ記されている。Franz Rosenthal, *A Grammar of Biblical Aramaic* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983), 24.

⁶ S. R. Driver, *Introduction to the Literature of the Old Testament* (New York: Meridian Books, 1956), 508.

⁷ T. C. Mitchell and R. Joyce, "The Musical Instruments in Nebuchadnezzar's Orchestra," D. J. Wiseman, ed., *Notes on Some Problems in the Book of Daniel* (London: The Tyndale Press, 1965), 25-26., K. A. Kitchen, "The Aramaic of Daniel," *Notes*, 77., Peter W. Coxon, "Greek Loan-Words and Alleged Greek Loan Transactions in the Book of Daniel," *Glasgow University Oriental Society Transactions* 25 (1973-74), 32, 36-37., Gerhard F. Hasel, "The Book of Daniel and Matters of Language: Evidences Relating to Names, Words, and the Aramaic Language," *Andrew University Seminary Studies*, Vol. 19, No. 3 (Autumn 1981), 216., Edwin M. Yamauchi, "Daniel and Contacts Between the Aegean and the Near East before Alexander," *Evangelical Quarterly* 53. 1 (January-March 1981), 47., Stephen R. Miller, *Daniel*, The American Commentary Vol. 18 (Broadman & Holman Publishers, 1994), 29.

⁸ Phillips Barry, "On Luke XV. 25, συμφωνία: Bagpipe," *Journal of Biblical Literature* 23-2 (1904), 180-190.

⁹ George F. Moore, "Συμφωνία not a Bagpipe," *Journal of Biblical Literature* 24-2

これらの論文が発表されて以降、ダニエル書 3 章 5 節の *sûmponyāh* に関する論文は、管見にして見いだすことができなかった。後に公刊された種々のダニエル書注解には、それらの論文が援用されている。例えば、John E. Goldingay は、*sûmponyāh* について以下のように注解している¹⁰。

סוּמְפוֹנְיָה corresponds to συμφωνία. It can denote ensemble playing, here indicating the instruments playing together after each plays individually, in accordance with common practice. Later it can refer to a particular instrument, perhaps double-flute, drums, or bagpipes. When Antiochus Epiphanes revels to the συμφωνία (Polybius 26.1.4), it could have either meaning. Its omission in v7 (whether original or not) is more natural if it is taken to refer to playing together; it would be less dispensable if it referred to a specific instrument.

Goldingay が上記において言及している “double-flute” は、Moore の主張した “pan’s pipe” の説¹¹ に関連し、“drums” は、紀元前 6 世紀に起きたギリシア語方言 *tympanon* の読み替えが *sûmponyā* になったという Mitchell と Joyce の説¹² に関連し、“playing together” は、“‘a chorus of singers’ or ‘a band’” という Barry の説¹³ を援用しての注解であろう。このような *sûmponyāh* に関する多様な解釈が邦訳聖書の訳語である「風琴」(bagpipe)、「風笛」(pan’s pipe or whistle)、「双

(1905), 166-175. Moore の論駁に対し、Barry は詳細な反論を試み、Bagpipe が意味されていることを再主張した。Barry, “Daniel 3:5, Sûmpōnyāh,” *Journal of Biblical Literature* 27-2 (1908), 99-127.

¹⁰ John E. Goldingay, *Daniel*, World Biblical Commentary, Vol. 30 (Dallas, Texas: Word Books, 1989), 65.

¹¹ Moore, “Συμφωνία,” 175.

¹² Mitchell and Joyce, “The Musical Instruments,” 26.

¹³ Barry, “On Luke XV. 25,” 182., Joyce G. Baldwin は『風笛』は、楽器のことではなく、むしろ『斉唱』を意味するものと思われる。あるいは、打楽器のことを意図したのではと議論されてきた」と同様の注解をしている。ジョイス・G・ボールドウィン『ダニエル書』ティンデル聖書注解、いのちのことば社 (2007 [1978] 年) 116 頁。“...harmonious union of many voices or sound...” : Hasel, “The Book of Daniel,” 216.

笛」(double-flute)に反映されている。

2 3章7節に風琴が記されていないのは何故か

新共同訳で風琴と訳出されている *sûmponyāh* が関連する箇所は、ダニエル書3章における4つの節である。本論におけるもう一つの課題である、風琴が3章7節に何故記されていないかについて論考をさらに進める。以下に当該箇所の楽器名を列記する。

- 5節 角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴
- 7節 角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴
- 10節 角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴
- 15節 角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴

当該箇所の原語も同じように列記する。

- 5節 סוּמְפֹנְיָה פְּסִנְתְּרִין שִׁבְכָא קִיתָרוֹס מְשֻׁרְקִיתָא קְרָנָא
- 7節 פְּסִנְטְרִין שִׁבְכָא קִיתָרוֹס מְשֻׁרְקִיתָא קְרָנָא
- 10節 סִיפֹנְיָה פְּסִנְתְּרִין שִׁבְכָא קִיתָרוֹס מְשֻׁרְקִיתָא קְרָנָא
- 15節 סוּמְפֹנְיָה פְּסִנְתְּרִין שִׁבְכָא קִיתָרוֹס מְשֻׁרְקִיתָא קְרָנָא

際立つ相違は、7節に *sûmponyāh* が記されていないことである。旧約聖書原典(BHS)の脚注(critical apparatus)を参照すると、ケニコットによる多くの異読写本、また、七十人訳のアレキサンドリア写本・マルカリヤヌス写本・ルキヤヌス校訂、また、ウルガタには סוּמְפֹנְיָא (and the *sûmponyāh*) が挿入されている。写字者の不注意によって7節の *sûmponyāh* が脱落してしまったとの推察が

想起されるが¹⁴、旧約聖書写本における一語脱落の想定はなかなか困難である。誤読や誤記は想定される。例えば、10 節の *syponyāh* について、BHS の脚注は、ケレー¹⁵ として *sūponyāh* を提示し、また、タルグム¹⁶ における記載の *wsympyh* も提示している。しかし、整合性に大きな問題を残す記載である一語脱落は、ソーフェリーム¹⁷ の作業においては想定し難いことであり、さらには、難しい読み方 (*lectio difficilior*) を採用する本文批評の原則を援用するならば¹⁸、BHS の本文の読みが妥当であると見なされる。

では、7 節において *sūmponyāh* が記載されていない理由は何であろうか。ダニエル書 3 章 4 節から 18 節に至る直接文脈の内容に注目しつつ論考を進めたい。バビロニアの慣習として王の勅命を伝えるのは伝令官の役目であった¹⁹。王の言葉に人々の注目を集めるため、また、勅令を受ける儀式に荘厳さを与えるために音楽が用いられることは、多くの文明において見られる現象であった²⁰。それほどに王の言葉には権威があったのである。それゆえ、以下に転載するダニエル書 3 章 4 節～6 節は、正確に伝えなければならない重要な王の言葉だったのである。

⁴ 伝令は力を込めて叫んだ。「諸国、諸族、諸言語の人々よ、あなたたちに告げる。⁵ 角笛、横笛、六絃琴、竪琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器による音楽が聞こえたなら、ネブカドネツアル王の建てられた金の像の前にひれ伏して拝め。⁶ ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。」

¹⁴ Mitchell and Joyce, "The Musical," 25.

¹⁵ E・ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究』日本基督教団出版局（1997 年 [第五版 1988 年]）38 頁。

¹⁶ 『旧約聖書の本文研究』120 頁以下。

¹⁷ 『旧約聖書の本文研究』32 頁。

¹⁸ 『旧約聖書の本文研究』175 頁。

¹⁹ Miller, *Daniel*, 113.

²⁰ Goldingay, *Daniel*, 70.

後続の 7 節は、ナレーター言葉であり、10 節は、勅令の聞き手でもあったカルデア人の台詞となっている。中傷の言葉を聞いたネブカドネツアル王は、怒りに燃えて再度命令を下している。そのような文脈の中に 15 節が存在する。5 節と 15 節は、実に王の言葉そのものである。

ところで、六絃琴と豎琴の表記に以下のような相違が見られる。

	六絃琴	豎琴
5 節	קִיתָרוֹס	סָבְכָא
15 節	קִיתָרֹס	שָׁבְכָא

しかし、いずれの相違も許容し得る。すなわち、5 節 קִיתָרוֹס の *hōlem waw* (וֹ) が 15 節では省略形 (defective writing) ²¹ *hōlem* (וֹ) になっている。さらに、5 節 סָבְכָא の第一子音の *sāmek* (ס) が 15 節では שָׁבְכָא と記されているように *śin* (שׁ) である。*sāmek* (ס) と *śin* (שׁ) は、同音の子音であり²²、誤記とは違うものである。他方、7 節と 10 節には、以下のような相違が見られる。

	十三絃琴	風琴
7 節	פְּסִנְטָרִין	
10 節	פְּסִנְתָּרִין	סִיפְנִיָּה

7 節の פְּסִנְטָרִין の四番目の子音 *tēṭ* (ט) が 10 節の פְּסִנְתָּרִין では *tāw* (ת) になっている。これらの子音も同音であり誤記とは言い難い²³。

²¹ Christo H. J. van der Merwe, Jackie A. Naudé, *A Biblical Hebrew Reference Grammar*, Biblical Languages: Hebrew, no. 3, ed. Stanley E. Porter and Richard S. Hess (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999), 31.

²² Ibid., 25.

²³ Ibid.

以上の概観によって、記者自身の目撃情報をもとに記述されたのか、または、他の目撃者の話を聞いて口述筆記されたのかは不明だが、ダニエル書3章の当該箇所が慎重に記述されたことは文脈からも想定し得る。7節における *sûmponyāh* の欠落は、写本書写の過程における欠落ではなく、そもそも欠落などではなく、最初の記述の段階において記載されていなかったと推察するのである。10節の *syponyāh* に関して、BHS の脚注がケレーとして *sûponyāh* を提示しているように、*sûmponyāh* は、ユダヤ人にとって馴染みの薄い、書写しづらい単語であった可能性がある。ダニエル書3章5節と15節は、王の勅命の言葉であるから、王の発言とおりに記された。しかし、角笛や横笛や竪琴と異なり、馴染みの薄い六絃琴や十三絃琴や風琴は、ユダヤ人のみならずカルデア人にとっても発音し難い用語だったのだろう。カルデア人の発音は、10節において *syponyāh* と記されたとおりである。他方、相対的に自由度があったナレーターは、7節において、不慣れな用語の *sûmponyāh* を王の言葉の「あらゆる楽器」(כָּל־זִמְרָא “all kind of music”) に含めることによってその表現を省略したのではないかと推定するのである²⁴。

²⁴ cf. Coxon, “Greek Loan-Words,” 30.